

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

特別支援教育専攻/島田  
恭仁

### ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

#### I. 学長の定める重点目標

##### I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

#### 1. 目標・計画

① 授業内容： 知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養できるように、心理学的な実証的証拠(エビデンス)を踏まえた上で、それらの児童の障害特性・アセスメント法・指導法に関する授業を展開する。

② 授業方法： 知的障害や発達障害に関する専門的な知識を理論知のみで終わらせることがないように、具体的な事例に即して説明を行う、実習的な作業を取り入れる、グループ構成して学生・院生同士でディスカッションを行う等、体験学習的な要素を取り入れる。

③ 成績評価： 卒論・修論作成のみでなく、教員採用試験においても文章表現を行う力が重視されるため、試験やレポートはあくまで論文形式で行うことにする。知的障害や発達障害に関する授業の内容を論旨を整えて要約できるかどうか、習得した知識を元に独自の発想で論を展開できるかどうかを評価のポイントとする。

#### 2. 点検・評価

① 授業内容： 学部や大学院の授業において、行動観察・授業観察・生育歴の聴取・各種心理検査の結果(WISC-IV・DN-CAS・LDI-R, 等)に基づくアセスメント法を体験的に学習できる機会を設け、心理学的な実証的証拠(エビデンス)を踏まえた上で、児童の障害特性を理解し、最適な指導計画を立案することの重要性を詳述した。

② 授業方法： 学部や大学院の授業において、小学校における特別支援教育を参観する機会を設けたり、立案した指導計画に基づいて実際に教材を作成する機会を設けたりして、具体的な事例に即して、実習的な作業を行いながら、特別支援教育の実践について体験的に学習できるようにした。

③ 成績評価： 学部においても大学院においても、論文形式のレポートを課し、授業の内容を論旨を整えて要約できるかどうか、習得した知識を元に独自の発想で論を展開できるかどうかについて評価し、文章表現力の育成に努めた。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

① 学部と大学院の授業・ゼミナールにおいて、近年開発された心理検査についての専門的な知識・技能を涵養し、知的障害児や発達障害児の個別指導計画の立案に役立つ先端的なアセスメント方法について検討する。さらに、立案した指導計画に基づいて事例研究を実施し、卒論・修論の作成につなげてゆく。

② 新たに開設される「教職実践演習」において、特別支援教育専修の学生の指導を担当する。特別支援学校での実習並びに、特別支援教育のコアとの連携を保ち、専修の学生に役立つユニークなカリキュラムを構築できるように工夫したい。

#### 2. 点検・評価

① 特に大学院の授業において、近年開発された心理検査についての専門的な知識・技能を涵養し、知的障害児や発達障害児の個別指導計画の立案に役立つ先端的なアセスメント方法について詳述した。さらに、ゼミナールにおいては、立案した指導計画に基づいて事例研究を実施し、修論の作成につなげてゆくことができた。

② 学部の「教職実践演習」において、主に特別支援教育専修の学生の指導を担当した。教員に求められる資質・能力の統合を図ることを目的として、小学校内での場面指導のロールプレー、構成的グループエンカウンター、特別支援教育実習の振り返りと省察、等を実施し、特別支援教育のコアカリキュラムの集大成につなげてゆくことができた。

### Ⅱ-2. 研究

#### 1. 目標・計画

① LD児への対応が深刻な問題となっている英語圏の国では、読み困難の判定がどのように行われているのかについて調査研究を実施し、日本の児童にも役立つアセスメント方法について検討を行う。研究の成果を全国規模の学会で報告する。

② LD児への対応に取り組んで間もない日本の小学校では、読み困難の判定がどのように行われているのかについて調査研究を実施し、通常学級の教員がLDのアセスメント法についてどのような意識をもっているのかを検討する。研究の成果を全国規模の学会で報告する。

#### 2. 点検・評価

① LD児への対応が深刻な問題となっている英語圏の国では、読み困難の判定がどのように行われているのかについて、現地の小学校を訪問して調査研究を実施した。その結果、英語圏の国の教師は読みの流調性や文字レベルでの音読の正確性に基づいて、児童の読み困難に気づく機会が多いことが分かった。

② LD児への対応に取り組んで間もない日本の小学校では、読み困難の判定がどのように行われているのかについて、国内の17校の小学校を対象にして調査研究を実施した。その結果、日本の通常学級の教師は単語レベルでの音読の正確性に基づいて、読み困難に気づくことが確かめられた。さらに、読み困難への気づきに関する教師の意識について、英語圏と日本との比較を行い、研究の成果を全国規模の学会で報告した。

③ 英語圏の国と日本においてスクリーニングされた、小学校低学年の読み困難児に対して、評定スケール・各種検査・文章音読課題を用いたアセスメントを個別に実施した。その結果、いずれの国でも、ほぼ正確に読み困難の抽出がなされていることが分かったが、アセスメント結果の解釈法には基本的な相違のあることが確かめられた。研究の成果を全国規模の学会で報告した。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

① 学内における各種委員会の委員として、本学の運営に参画する。

② 特別支援教育専攻の院生が専門資格を取得しやすくするために、院のカリキュラムをより一層整備する。さらに、県内の有資格者や当専攻修了の合格体験者を招いて、現場での実践体験や合宿及び最終試験に向けての対策等について、講習の機会を設ける。

### 2. 点検・評価

① 就職委員、施設整備委員、学部3年生のクラス担任を兼務して、本学の運営に参画した。特に、就職委員として就職支援行事に協力し、模擬集団面接・模擬個人面接においてロールプレーと講評を行った。

② 特別支援教育専攻の院生が専門資格を取得できるようにするために、資格取得希望者向けのフィールド研究を実施した。今年度は現職教員2名が受講し、小学校内で特別なニーズのある児童に対する支援を実地体験させたことにより、資格取得に向けての動機付けを高めることができた。また、当ゼミ修了の合格者(有資格者)を招いて、合宿及び最終試験に向けての対策について、講習の機会を設けることもできた。

③ 当専攻で受け持った教職大学院の現職教員向け授業(発達障害児への理解と対応)の主担当になり、授業計画の作成、オリエンテーション、心理分野での授業、総括と授業評価のまとめ、等の業務を行った。発達障害に関する心理学的・教育的・医学的知見をバランスよく取り入れたため、授業評価では高い得点を得ることができ、専門性を高めるのに役立つと答えた現職教員が多かった。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

### 1. 目標・計画

① 小中学校・特別支援学校・教育委員会等が主催する研修会や講習会に協力し、特別なニーズを有する児童生徒に対する支援のあり方について意見交換を行う。

② 教育委員会や専門資格の認定協会との協力の元で、LD・ADHD・高機能自閉症等の児童への支援活動に従事する教員向けに、事例検討会などの機会を設け、本学の特別支援教育専攻と地元の特別支援教育関係者との連携を密にする。

### 2. 点検・評価

① 文科省が主催する教員免許状更新講習(必修領域)に講師として参画し、特別なニーズを有する児童に対する支援のあり方について、近年における動向に関する講習を行った。

② 教育委員会が主催する「子どもの発達教育相談会」に相談員として参画し、特別なニーズを有する児童に対する支援のあり方について、保護者への具体的なアドバイスをを行った。

③ 公開講座「特別なニーズのある子どもへの支援」に講師として参画し、医療機関に従事する言語聴覚士(ST)と事例について検討する機会を設け、当専攻と地元の特別支援教育関係者との連携を密にした。

④ 教育委員会が主催する「小・中学校通級指導教室担当者研修会」に講師として参画し、市内小中学校の通級指導担当教諭と事例について検討する機会を設け、地元の特別支援教育関係者との連携を密にした。

### Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

今年度は、教職大学院の現職教員向け授業(発達障害児への理解と対応)の主担当になり、発達障害に関する心理学的・教育的・医学的知見をバランスよく取り入れた授業を計画し、実施した。その結果、授業評価では高い得点を得ることができ、教職大学院の現職教員の専門性を高めることに寄与した。カリキュラムマップとの関連で言えば、生徒指導力・コーディネート力・経験から学ぶ力の育成に成果があった。また、教員免許状更新講習や公開講座のみでなく、通級指導担当の現職教員を対象にした事例検討会や、保護者を対象にした発達教育相談会等に参画し、LD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒への対応のしかたについて、教師や保護者に啓蒙することができた。さらに、これらの講習・事例検討・相談の機会を通じて、自身の研究の成果を実践の場に還元することができ、当専攻と地元の特別支援教育関係者との連携を深めることができた。上述の諸点で、本学への総合的な貢献を行うことができたと言える。